

Journal of Chubu University Education

No. 20
2020

【実践研究・実践報告】

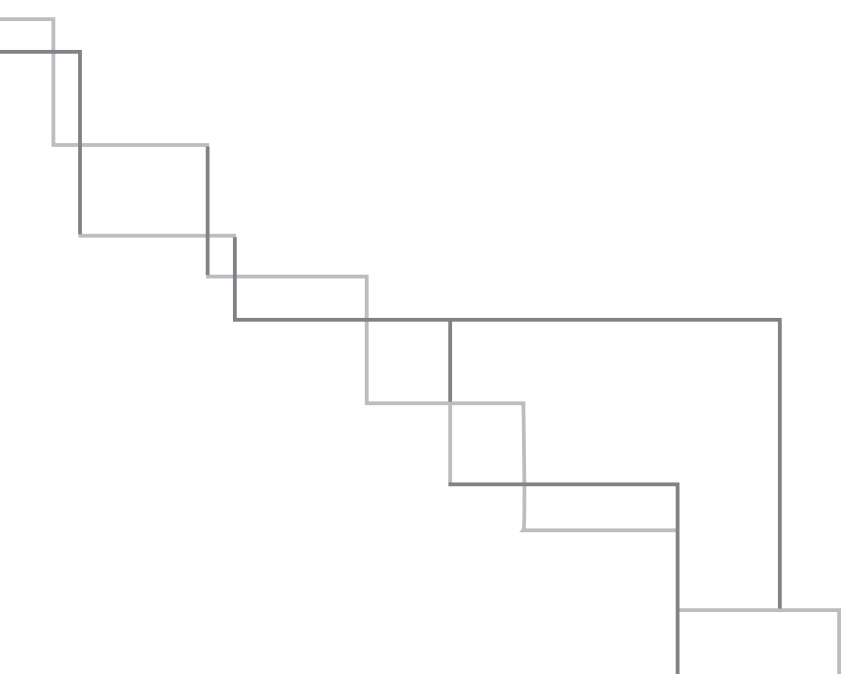
保健看護・幼児教育・スポーツ保健医療の多学科協同による

乳児と母親を対象とした子育てセミナーの開催 中山知未・岡倉実咲
山下 恵・千田隆弘
北辻耕司・繁野行宏
横手直美

【Practical Reports】

Parenting Seminars for Infants and Mothers Based on Collaboration
between the Departments of Nursing, Early Childhood Education,
and Lifelong Sports and Health Sciences

..... NAKAYAMA Satomi, OKAKURA Misaki,
YAMASHITA Megumi, SENDA Takahiro,
KITATSUJI Koji, SIGENO Yukihiro
and YOKOTE Naomi



保健看護・幼児教育・スポーツ保健医療の多学科協同による 乳児と母親を対象とした子育てセミナーの開催

中山 知未^{*1}・岡倉 実咲^{*1}・山下 恵^{*2}・千田 隆弘^{*3}
北辻 耕司^{*4}・繁野 行宏^{*5}・横手 直美^{*6}

要 旨

著者らは、乳児をもつ母親の育児ストレスの軽減と、子どもの健やかな成長発達とともに母子相互作用の促進を図ることを目的に、2013年度より母児のエクササイズと育児教育を融合させた「子育てセミナー」を開催してきた。2019年度は新たな試みとして、保健看護学科の母性看護学ゼミ、幼児教育学科の子育てすくすく育て隊、スポーツ保健医療学科の救急救命コースの3学科の学生をサポートスタッフとして迎え、多学科協同による「子育てセミナー」を開催した。学生は受付係・体調確認係・駐車場誘導係などの役割を担ってセミナー運営に携わった。実際の母児の様子や、母親同士の交流場面を観察することにより、学生は、乳児の発達と母子相互作用、母親同士の交流等の重要性を学ぶと同時に、本セミナーが地域の子育て支援において担う役割についても考察することができていた。さらに、学生は講義や臨地実習とは異なる視点で、他職種との専門性の違いや連携についても実感することができ、貴重な教育の場となったことが分かった。

キーワード

多学科協同、子育て支援、セミナー運営、乳児、母親

1 はじめに

わが国の母子を取り巻く環境は核家族化や近隣関係の希薄化がすすみ、母親は育児不安やストレスを抱きやすく、産後うつや乳幼児虐待に発展するケースが社会問題となっている。厚生労働省の報告¹⁾によると、「子育ての悩みを相談できる人がいる」と回答した母親は、2003年は73.8%であったが、2014年には、43.8%となり、子育ての孤立化は深刻さを増している。また、同報告より、妊娠・出産・産後期間の不安を解消するために必要なサービスとして、「育児の相談の場」「妊産婦同士の交流の場」を求める母親が多いことが分かっている。

著者らは、乳児をもつ母親の育児ストレスの軽減をはかるには、子どもの健やかな成長発達とともに母子相互作用の促進を図る子育て支援が効果的であると考え、その具体的方策として母児のエクササイズと育児教育を融合させた「子育てセミナー」を2013年度から保健看護学科の学生スタッフとともに開催してきた。

これまで開催した「子育てセミナー」の研究結果より、母親に対する効果として、産後うつのリスクが減少することが明らかになり、看護学生についても、臨地実習時とは異なった視点から継続的な育児支援の必

要性について理解し、学生自身も母子と共に成長できる「共育共学」の機会であることが明らかとなっている²⁾³⁾。

2 2019年度の新たな試み「3学科協同」

本学には、保健看護学科以外にも育児教育と関連深い資格系の幼児教育学科とスポーツ保健医療学科の救急救命コースがある。共働き世帯の増加によって0～2歳児保育が増加していることから、保育士を目指す学生が乳児の成長発達のプロセスを観察し、母親への支援を体験から学ぶことは、保育技術の向上と子育て支援社会の理解につながる。また、新生児・乳幼児の救急車の出動件数は年間で279,309件で全出動の4.7%にも相当することから⁴⁾(2018年)、救急救命士を目指す学生が乳児の身体的特徴や保護者の心理を理解することは、緊急事態にある母子に的確に対応するうえで重要である。乳児の成長発達や母子間の相互作用を目の前で観察し、子育て支援のサポートを実際に行う体験は、母子と関わる職業を志す学生にとって貴重な教育の場となると考える。

以上のことから、2019年度は保健看護学科の母性看護学ゼミの学生(以下、LK学生)、幼児教育学科の子

*1 看護実習センター 実習講師

*2 生命健康科学部保健看護学科 講師

*3 現代教育学部幼児教育学科 講師

*4 生命健康科学部スポーツ保健医療学科 助教

*5 生命健康科学部スポーツ保健医療学科 助手

*6 生命健康科学部保健看護学科 准教授

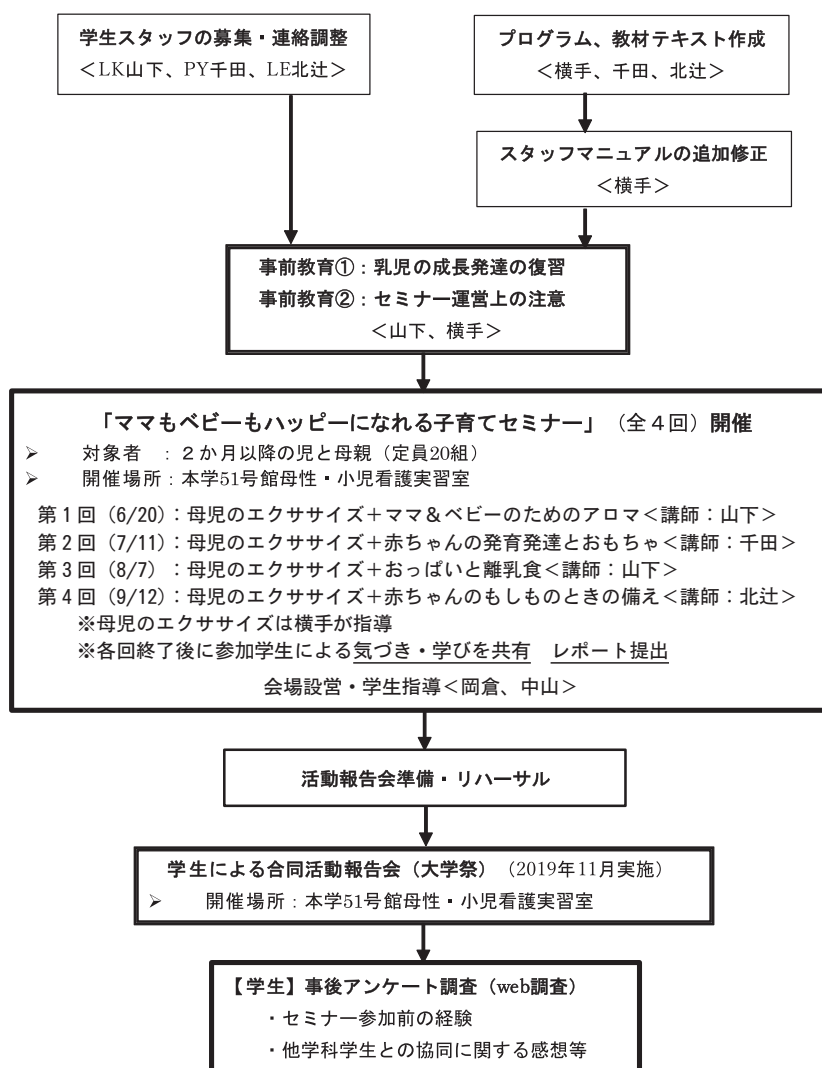


図1 2019年度3学科協同による「子育てセミナー」の実施計画

育てすすく育て隊の学生(以下、PY学生)、スポーツ保健医療学科の救急救命コースの学生(以下、LE学生)が子育てセミナーのサポートスタッフとして、協同することとなった。また、3学科の学生が協同し、お互いの学びを共有することで、学生の人間力育成への貢献も期待するとともに、子育て支援の新しいアイデアの創造も期待された。

3 実践結果

2019年度は図1に示す通り、主には、学生スタッフの募集、事前教育、子育てセミナー4回、大学祭での合同活動報告会というながれで開催した。

3.1 事前教育の様子

事前教育で学生は、保健看護学科の横手准教授より、本セミナーの目的とプログラム、学生スタッフとしての役割、乳児の成長発達について講義を受けたのちに、赤ちゃん人形を使用して実際の母児のエクササイズを体験した(写真1)。



写真1 赤ちゃんモデルを使ったLK学生への指導の様子

事前教育①はLK、PYの学生にとっては復習といってもよい内容だったが、LEの学生にとっては未習の内容であり、乳児の発育発達を簡潔に示した配付資料が好評であった。

3学科の学生の日程を調整することに苦慮したため、全員が同一の事前教育を受けることができず、この点に関しては、今後改善の余地がある。

表1 2019年度 子育てセミナーの参加者および学生スタッフの状況

日付	内 容	参加 組数	学 生		
			保健看護学科	幼児教育学科	スポーツ 保健医療学科
6 / 20	母児のエクササイズ【横手】 ママ＆ベビーのためのアロマ 【講師：山下】	14組	3 名	5 名	0 名
7 / 11	母児のエクササイズ【横手】 赤ちゃんの発育発達とおもちゃ 【講師：千田】	14組	3 名	7 名	0 名
8 / 7	母児のエクササイズ【横手】 おっぱいと離乳食【講師：山下】	15組	5 名	2 名	3 名
9 / 12	母児のエクササイズ【横手】 赤ちゃんのもしものときの備え 【講師：北辻】	16組	3 名	4 名	3 名
		述べ59組	述べ14名 (2回参加2名含む)	述べ18名 (3回参加1名含む)	述べ6名 (2回参加3名)
11 / 3	子育てセミナー活動報告会 & ファミリーエクササイズ	7 組	16名	4 名	1 名

3.2 母児のエクササイズのプログラム構成

子育てセミナーは、中部大学エクステンションセンターとの共催事業として全4回シリーズ（月に1回開催）で開催している。2019年度の参加者と学生スタッフの状況は、表1の通りであった。

毎回、受付後に、母児の体調確認と乳児の体重チェックを行い、乳児の体重変化や哺乳について質問があれば、助産師資格を持った教員が対応した。

母児のエクササイズに関してインストラクター資格を持つ教員が進行役となり、乳児のエクササイズでは、童謡を歌いながら手遊びやベビーマッサージを行い、母児のスキンシップをはかった。乳児が笑顔を見せると母親も笑顔になり、母児の相互作用が存分に観察できる時間であった。さらに、毎回、月齢に合わせたエクササイズを行い、乳児の成長発達を促した。

児のエクササイズ後に、母親のためのエクササイズの時間を設け、日頃の育児で凝っている身体をほぐすエクササイズやストレッチを行った（写真2）。

母親のエクササイズ中は母親が自分自身のこと集中できるよう、乳児の様子に合わせ、学生が抱っこをするなど乳児のお世話を担当した。

3.3 子育てミニレッスンについて

子育てセミナーでは、毎回異なるテーマで20分程度の子育てに役立つミニレッスンを企画した。講師は、保健看護学科の教員だけでなく、幼児教育学科とスポーツ保健医療学科の教員も担当した。

第1回の「ママ＆ベビーのためのアロマ」では、ア



写真2 母親のためのエクササイズ

ロマの特徴と使用上の留意点を説明した後、母親同士が二人一組となって腕のマッサージを行った。心地よい香りとともに参加者同士の会話が弾み、今後のセミナーへの期待感を高める回となった。

第2回の「赤ちゃんの発育発達とおもちゃ」では、幼児教育学科の千田講師から、乳幼児の発育発達とおもちゃの選び方などを紹介した（写真3）。参加した母親からは矢継ぎ早に質問があり、関心の高さがうかがえた。

第3回の「おっぱいと離乳食」では、保健看護学科の山下講師による講話後に小グループでの座談会を行い、各家庭での母乳育児や離乳食の悩み、工夫を話し合った。助産師でもある教員に質問できる時間でもあり、学生は疑問が解決することで母親たちの表情が緩む様子を目の当たりにし、専門知識の必要性を感じていた。



写真3 「赤ちゃんの発達発達とおもちゃ」



写真5 非接触型体温計による体温測定の様子

第4回の「赤ちゃんのもしものときの備え」では、スポーツ保健医療学科の北辻助教から乳幼児の救急隊要請時の注意点や誤飲時の対応についてデモンストレーションを交えて説明した（写真4）。LE学生がアシスタントとして母親をサポートし、母親全員が乳児のシミュレーション人形を用いて、異物の吐き出させ方と乳児の心肺蘇生法を演習することができた。



写真4 「赤ちゃんのもしものときの備え」

3.4 セミナー参加時の学生の様子

セミナー時、学生は会場設営や受付係、体調確認係、駐車場誘導係などの役割分担をし、運営に携わりながら、実際の乳児と母親の様子や、母親同士のやりとりを観察できた（写真5、6）。

はじめは乳児や母親とどのようにコミュニケーションをとるとよいか戸惑う学生もいたが、自らも乳児の体重・体温測定をしたり、子育てミニレッスンで母親の実践の補助をしたり、乳児の世話を体験することで少しずつ慣れていった。泣いていた乳児が、学生がやさしく抱っこしたりすることで泣き止んだり、笑顔を見せてくれたりすると、緊張が緩んだようで学生にも笑顔が増えていた。母親とのコミュニケーションについても、「お子さん、可愛いですね」「〇〇ちゃん、こんにちは」といった乳児を介して話しかけることで、会話のきっかけをつかみ、積極的に母親の育児に対す



写真6 受付の様子

る思いを聞く学生もいた。

3.5 セミナー後の振り返り～ショート・ミーティングでの学びの共有

セミナー終了後は後片付けを行った後、毎回、振り返りのためにショート・ミーティングをその場で行った。学生が一番多い感想は、「赤ちゃんが可愛かった」であった。そのような素直な感想もあれば、乳児の成長発達や母子間の相互作用、母親同士の関わりを目の前で観察できたことでの気づきを発表する学生や、講義や臨地実習での学びを自己の観察を通して再認識する学生も多かった。

3.6 大学祭での合同活動報告会

全4回のセミナー終了後、各学科の学生ごとに本活動を通しての学びをまとめ、大学祭で発表する機会を設けた。この報告会でも、学科により学びと気づきの相違点が明らかになった。

発表会には、事前に案内状を出して招待したセミナーの「卒業生」母児が父親や友人親子とともに多数参加され、同窓会のようなあたたかい雰囲気の中、活動報告を行った（写真7）。感想を求められてマイクを向けられた父親は照れながらも、「こんな楽しそうにやっていたんですね」などと答えてくださり、ご夫婦での会



写真7 大学祭での活動報告会の様子

話のきっかけにもなったようだった。その後、横手准教授の運動指導のもと、ファミリーエクササイズを行った。

報告会で発表された、各学科の特徴的な学生の学びを以下に抜粋する。

保健看護学科

- ・お母さん同士の繋がりを作ることは、1対1の家での子育てといった閉鎖的な空間から社会的な交流の場へと繋げることになり、子育ての支援にも繋がる。
- ・健診などで病院で診てもらう機会以外でも、専門的な知識をもった人に相談し悩みを解決できる機会は、とても大切である。
- ・お母さんからのタッチングなどコミュニケーションで、子は笑顔になり、その笑顔を見たお母さんも笑顔になっている姿が印象的であった。

幼児教育学科

- ・子どもだけでなく、保護者の方のケアの大切さについて学ぶことができた。
- ・学生の緊張は子どもに伝わるため、リラックスして関わる必要があることを学んだ。
- ・遊んでいる赤ちゃんの表情・反応の意味を理解し、発達にあった支援やおもちゃを用意していく必要がある。
- ・月齢によって発達が大きく違うことを実際に感じて学べた。月齢での発達はどのように違うかしっかり理解したい。

スポーツ保健医療学科

- ・赤ちゃんは言葉で意思表示をできないので、泣いたり笑ったり、少しの表情の違いや動きなどの、ちょっとした変化にお母さんは敏感になるのではないかと考えた。
- ・このようなセミナーがあることで、お母さん同士の繋がりができ、不安が解消されることで、子育てに

プラスになるのではないかと感じた。

- ・セミナーに参加して、赤ちゃんやお母さんへの接し方を学ぶことができた。接し方を学んだことで、赤ちゃんの出すサインに気づき、適切な対応ができ、お母さんの不安を和らげるような言葉遣いや接し方について、自分なりに考えることができた。自分が現場に出たとき、赤ちゃんやお母さんに安心を与えられる救急救命士を目指していきたい。

4 考察

2019年度の子育てセミナー開催の目標の一つは、保健看護学科・幼児教育学科・スポーツ保健医療学科の3学科の学生が協同し、お互いの学びを共有することであった。

保健看護学科の学生は、実習では主に新生児とその母親の産後の看護を行うため、産後（生後）2ヶ月以降の母児に接する機会が少ない。今回のセミナーを通して、乳児の成長発達の月齢による差と個人差だけでなく、母親と児との関わり、母親同士の交流の意味や専門職に相談できる場の重要性など、様々な気づきを得ていた。

幼児教育学科の学生は、実習やサークル活動で幼児と触れ合う機会は多いが、乳児とその母親と接する機会が少ない。セミナーに参加した母親と乳児の関わりを見て、乳児の成長発達の違いだけでなく、母親と児によって育児にも個性があることに気付くことができていた。

スポーツ保健医療学科の学生は、乳幼児やその母親と接する機会がほとんどなく、3学科の学生の中でも最も緊張していたが、他学生が母児と関わる様子を見たり、実際に児を抱かせてもらう中で、場に慣れていていた。「もしものときの備え」のミニレッスンでは、乳児の異物誤飲時の対応を的確に母親に教えることができており、専門性を発揮していた。救急救命士は、非常時の対応が職務のため、平時の母児と関わったことで、どのような声掛けや関わりが母児にとって安心感があるのかを知ることができ有意義であったと話していたのが印象的であった。

このように、各学科の学生は、本セミナーの多学科協同を通し、子どもや母親との関わり方が学科の学生ごとで違っていたことに気づき、講義や臨地実習だけでは、学びきれない他職種との専門性の違いや連携について実感することができていた。また、母子の関わりや母親同士の関わり、母親と教員（専門職）との会話やミニレッスンにおける情報提供内容にも着目し、本セミナーが担う役割についても考察できていた。

今回の子育てセミナーには、全期間で生後2か月から10か月の乳児が参加した。複数の乳児を同時に観察

できたことで、乳児の月齢による発達段階の違いや関わり方についても学ぶことができていた。さらに、複数回スタッフとして参加した学生は、前回参加時からの乳児の成長を実感する気づきも得られていた。

上記から3学科の学生は各々の専門的視点からの気づきがあり、本セミナーにおける3学科協同は貴重な教育の場となったと考える。

5 今後の展望

2020年度は子育てセミナー開始から10周年となる節目の年であったが、新型コロナウイルス感染症の問題から、すべてのエクステンションセンター公開講座が中止となった。「今年は開催しないのですか」といったお問い合わせもいただき、大変残念であった。

しかし、保健所や出産施設が主催している子育てサロンや各種教室も閉鎖が続き、母子の自粛生活も長期化している現在、母親の「孤」育てはますます深刻化している。そのような中、オンラインを活用したWebセミナーも開催されている。対面での直接的なコミュニケーションやケアが最善ではあるが、そのときの状況や時勢に合わせた子育て支援のあり方を探求したいと考えた。

そこで、母性看護学臨地実習施設でもある春日井市民病院にオンライン版子育てセミナーの共同企画を提案し、2020年11月に2回開催することになった。地域連携の強化としても、この機会を活かしたい。

また、2019年度の学生スタッフの事前指導で改善の余地があった日程調整も、オンラインを活用することで解決できる可能性がある。学生・教員共に過重負担とならずに、共育共学につながる子育てセミナーを今

後も継続できるよう、創意工夫で乗り越えていきたい。

謝 辞

本セミナーにご参加いただき、学生・教員もHappyにしてくださったお母さま方、赤ちゃんたちに、心から御礼申し上げ、御多幸と健やかなご成長を祈念します。

本セミナーを開催するにあたり、広報にご協力いただきました春日井市子ども政策課および本学のエクステンションセンターの皆様へ深謝いたします。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2018) 「妊産婦にかかる保健医療の現状と関連施策」 2020年7月13日アクセス
<https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000479245.pdf>
- 2) 横手直美、山下恵、岡倉実咲 (2015) 中部大学における子育てセミナー「ベビービクスと子育てミニレッスン」の開催報告と今後の展望, 中部大学教育研究, No.15, 29-33
- 3) 山下恵、岡倉実咲、橋本妙子、横手直美 (2018) 大学で開催する子育てセミナースタッフとしての経験が看護学生に及ぼす教育効果, 中部大学教育研究, No.18, 53-57
- 4) 総務省 (2019) 「平成30年中の救急出動件数等(速報値)」の公表, 報道資料 2020年6月30日アクセス
https://www.fdma.go.jp/pressrelease/houdou/items/190619_kyuuki_1.pdf

Parenting Seminars for Infants and Mothers Based on Collaboration between the Departments of Nursing, Early Childhood Education, and Lifelong Sports and Health Sciences

NAKAYAMA Satomi^{*1}, OKAKURA Misaki^{*1}, YAMASHITA Megumi^{*2}, SENDA Takahiro^{*3}, KITATSUJI Koji^{*4}, SIGENO Yukihiro^{*5} and YOKOTE Naomi^{*6}

- *1 Research Associate, Center for Nursing Practicum, Chubu University
- *2 Senior Assistant Professor, Department of Nursing, College of Life and Health Sciences, Chubu University
- *3 Senior Assistant Professor, Department of Early Childhood Education, College of Contemporary Education, Chubu University
- *4 Assistant Professor, Department of Lifelong Sports and Health Sciences, College of Life and Health Sciences, Chubu University
- *5 Research Associate, Department of Lifelong Sports and Health Sciences, College of Life and Health Sciences, Chubu University
- *6 Associate Professor, Department of Nursing, College of Life and Health Sciences, Chubu University

Abstract

The authors have been working on a child-rearing seminar since 2013. This seminar combines mother-child exercises with child-rearing education, to reduce child-rearing stress for mothers, support the healthy growth and development of children, and promote mother-child interaction.

In 2019, we took the novel step of hiring students as support staff from three departments: the Department of Nursing (attendees of a maternal nursing seminar); the Department of Early Child Education (members of the “Child-Rearing Volunteer Group”); and the Department of Lifelong Sport and Health and Medical Care (students enrolled in the “Emergency Lifesaving Course”).

The students assisted in the management of our parenting seminars by acting as receptionists, checking the physical condition of infants, and serving as parking lot assistants. Students learned about infant development, mother-child interactions, and interactions among mothers by observing the mothers and their children. Mothers also received support with child-rearing. The students acquired new perspectives on various specialties, as well as inter-occupational cooperation. This enhanced their experience of lectures and clinical training and thus served as a valuable educational exercise.

Key words

Multi-departmental Cooperation, Child-rearing Support, Seminar Management, Infants and Mothers